

英国芸術監督特集

取材・文
田中伸子

創劇の年間ラッシュを決める人。それが芸術監督だ。人気のある演劇家らから務める四重奏。演劇界の中心を左右する大きな役割を担う。比較的大胆な所が特徴的印象的な口癖は、イギリスでは30歳前後で小さな劇場や劇団などの芸術監督を経験した人物が、活動を重ね、40歳前後で大劇場に就くことが多くなった。ナショナル・シアター、グローブ座、ドンマー・ウエハハスといった各門劇場を目指し、切磋琢磨しあっている。

本稿では、中でも注目の芸術監督4人をご紹介します。



Rupert Gold

PHOTO: CHRISTIAN SIBALDI

ALMEIDA THEATRE

ス王室の未来を皮肉まじりに描いた『英国王チャールズ三世(14年)』で、オリヴィエ賞とトニー賞に輝いた英国演劇界のエース、44歳のルパート・ゴールド。演出業の傍ら、30歳の若さでイギリス中部のノーサンプトン劇場芸術監督に就任した。その後、前衛的な作風で知られる劇団ヘッドロンクの3代目芸術監督として頭角を現し、13年9月よりアルメイダ劇場の指揮を執っている。ウエストエンドの喧嘩から離れた北ロンドンのおしゃれエリア、エッジウェルに居を構える同劇場は客席数35の小劇場ながら演劇ファンが多く足を運ぶ、ロンドンの演劇シーンを語る上で欠かせない人気の劇場だ。「観客を失うのは簡単なことで、2回続けて失敗作を上演すればいい(笑)。そうならないように、彼らを啓蒙して劇場へ呼び込むのが僕の使命だ。例えば、昨年夏のオリヴィエ賞劇団上演企画の一つ、『オレスティア』(ロバート・アイ

た)にもかかわらず、それまでの動員記録を塗り替えるほどの成功を収めた。人気美術館のキュレーターのように、劇場にも年間ライヴアップを通してテーマを提示し、芸術面で統率が執れる人、さらにはチームの結束力を高めて率いる組織の長が必要、ということだね」

ゴールドの就任以降、彼の当世を意識したコンラッド・ボラーリ作品の上演という劇場としてのカラーの明確化が功を奏し、目玉演目の手が最も難しい劇場の一つに名を連ねているアルメイダだが、どこに勝負を見いだしているのか。

「確かに、世界に名の知れた劇場が軒を連ねるロンドンではほかの劇場との関係性がとても重要になってくる。若手劇作家の輩出で名高いロイヤル・コर्ट劇場、シェイクスピア戯曲の上演がおはこのグループ座など、個性を前面に押し出す劇場がしのぎを削る中、1980年の創設以降、アルメイダの歴史には常にアヴァンギャル

あ

なにはお気に入りの劇場はあるだろうか？

そう聞かれた時、劇場は、舞台、を上演する箱(建造物)にすぎないので、ことさらに箱にはこだわらない」と答える人は多いのではないだろうか。では、そんな箱に芸術家の「顔」が付いたらどうだろう。その顔に惹かれて、劇場に惹きつけられるかもしれない。

日本で芸術監督の起用により一気にその色が劇場に浮かび上がった例としては2009年、野田秀樹が初代芸術監督となった東京芸術劇場が思い当たる。野田作品を看板演目にも多くの新しい観客を

革新的な演出と経営手腕でフリンジを世界へ導く ルパート・ゴールド

「芸術監督はまず、優秀なアーティスト——さまざまなメディアで活躍する俳優や劇作家、技術者——が、仕事とはいえ、お金のためというよりも劇場のため、言い換えれば自分のためにその才能を掘

呼び込み、さらには彼に惹かれて集まった若手演劇人たちが創意的な作品を提供する。そうして泡盛に演劇の風を起こしたのだ。

しかし、日本ではいまだに劇場芸術監督制度はマイナーで、その仕事に就く人もごく一握りというのが現状だ。一方、18年からの新国立劇場次期芸術監督に現在、30代の小川絵梨子氏が抜擢されるなど、芸術監督の存在に関心が高まりつつあることは間違いない。だが、そもそも日本の劇場に芸術監督は必要なのか。その答えを探るべく、広く芸術監督制度を敷くイギリスの当事者たちに話を聞いた。

供してくれているということは何よりも肝に銘じることが大切なんだ。劇場には彼らの声を発する代弁者が必要で、それが芸術監督なんだと思う」

そう語ってくれたのは、イギリ

ドな精神が若くてきたと思ってしまうよ。時代に適した劇場であるためには変革も新しいという柔軟さ、そして、斬りまくる道を模索する姿勢、国内外を問わず新しい才能の紹介に尽力してきたこの劇場の在り方が、観客を刺激し続けているのだ」

劇場への公的資金援助が年々削られる中、舞台の活性化(アルメイダ・ライヴ)と称して今夏からグー

ルド演出×レイヴ・フュアインズ主演の話題作『リチャード三世』の映画館上演を現地で開始し、や、プロローグドウェイ&ウエストエンドへの進出など劇場経営にも柔軟性が要求される時代。「僕にとっての演劇は社会を反映するメディアなんだ」とゴールドは言う。世論を読み取り、劇場自体が進化し続ける、刺激的な環境を維持する。ゴールドの先駆者としての挑戦は続く。



「リチャード三世」



PHOTO: MARC BRONNER

12年、リチャード三世の骨が見つかったという中部スターの駐車場から物語をスタートさせる演出を施した

英国のみならず、日本でもタイタニック(15年)やランドホテル(16年)の演出でおなじみのトム・サザランド。ミュージカル界きっての注目株が、ロンドン中心のタイミナルであるチャリングクロス劇場に隣接するチャリングクロス劇場の芸術監督に就任したと聞きつけ、彼のもとへ。かつてミュージックホールとして使われていた同劇場が近年では貸館専らになり、それに伴い人の入りも激減していた。2年前、新経営者がミカド(14年)でサザランドへ演出の依頼をした



Thom Southerland

ランドミュージカルの改革者 トム・サザランド

ことをきっかけに、彼に芸術監督の白羽の矢が立ったのだ。

「サザランドではほとんどが一夜限りの客で、劇場にとっては見客なんだ。そこで僕は何となくもこの劇場を、多くの地方劇場が実践しているように、芸術監督が芸術路線を示して常連客を増やし、客が演目ではないところで劇場に突っ込んでくるような場所にしように思っている」と語った。

近年、現地の演劇ファンに評判の人気が高まって、サザランドの躍進のきっかけとなった劇場がサーク・フレイハウスだ。郊外の小劇場で彼は、大仕掛けなブロードウェイ・ミュージカルの大胆な再演を試みた。大きな作品世界を狭い空間でも機能させる新しいタイプの演出のランドミュージカルも、もとはこの小空間の奇跡から端を発している。同劇場ならではの臨場感を見逃すまいとサーク・フレイハ

「制作費を掛けすぎると失敗した時のリスクが高すぎる、冒險ができないよ。想像力を駆使して低予算で実験的な演出をくり返し、弊害を排除していきなり、逆に作品が当たった場合は世界ツアーにまで発展することも。僕は実際に『タイタニック』(13年)



2階建ての舞台装置を小スペースとして使うなど、大人数を演出する演出が得意なサザランド

シェンフィールド劇場を離れた9男の新たな挑戦 ダニエル・エヴァンス



Daniel Evans

勢いに乗る同劇場での仕事に期待を膨らませるエヴァンスが心地を語った。

「新しい環境で仕事に期待を膨らませるエヴァンスが心地を語った。『自分たちの経験からも劇場の指揮は芸術家に任せるのがいい。さもないけれど、劇場の目的やリソースが芸術とは無関係なものになりかねないからね』」

彼が就任する直前まで、同劇場には芸術監督が不在の時期があった。事務サザードが運営していたその2年間ですっかり機能が停滞してしまっただ劇場を、市民の手に取り戻すことから着手したのだという。児童演劇の上演の再開に、参加型プロジェクト、市民を巻き込み、劇場を盛り上げたことが

ティバル劇場の芸術監督に招かれたのが7月

「自分の経験からも劇場の指揮は芸術家に任せるのがいい。さもないけれど、劇場の目的やリソースが芸術とは無関係なものになりかねないからね』」

彼が就任する直前まで、同劇場には芸術監督が不在の時期があった。事務サザードが運営していたその2年間ですっかり機能が停滞してしまっただ劇場を、市民の手に取り戻すことから着手したのだという。児童演劇の上演の再開に、参加型プロジェクト、市民を巻き込み、劇場を盛り上げたことが



自身の兼任シーズン第1弾に、ブロードウェイで初めて人種問題に触れた27年切演の名作を演じた

「ひとりに変化をもたらすこと」をマニフェストとするエヴァンスの熱い思いが地域にメタモルフォーゼ(変身)を引き起すことは間違いない。

「文化は劇場で形をとり、そこに劇場に育つ文化が根付いているけれど、その反面、シェンフィールドと異なり、少々保守的であるという事実も否めない。そんな土地柄の観客を満足させることは大前提として、小劇場を使っちゃってと挑発的で過激な作品も取り入れていきたい」と語っている。